

総合問題

○岡田 いや、暑いね。

○深田 そうですね。札幌と言っても、意外に夏は暑いですからね。

○岡田 そういえば、こんなときにぴったりの話があるよ。

○深田 何ですか。

○岡田 気持ち的に涼しくなる話さ。

○深田 いいですね。

○岡田 それじゃ、話すよ。

「ひとり暮らし」っていう話ね。

反対していた両親を押し、切って、きょうからひとり暮らし。一人で起き、朝食を食べ、ごみを出して支度を整えた。あこがれのひとり暮らしを実現できたことで、その少年は満ち足りていた。家にかぎをかけ、毎朝、花に水をやっている近所のおばさんにあいさつをして、学校に向かった。

○深田 ああ、この話は知っていますよ。

○岡田 何だ、そうなんだ。

○深田 最後の「毎朝、花に水をやっている近所のおばさん」というところがポイントですよ。

○岡田 そうだね。真実を知ると、ぞっとするシリーズの一つだね。しかし、今の世の中では、結構際どい話ではある。

○深田 じゃ、こんな話はどうですか。

先ほど、3万円のヘッドホンが突然壊れた。音楽を大音量で聞き過ぎたせいか、いきなりぷつぷつ音が出なくなった。その男は怒りの余り、思わずテレビを床にほうり投げた。ずどんとテレビが床に落ちた振動を感じて、ふと我に返った。何をやっているんだ、このテレビは15万円もしたのだ。たまたま落とした場所には布団が敷いてあり、落ちた音は全くしなかった。多分、壊れていないだろうと思いながら、電源を入れた。映像は普通に映るのだが、全く音は出なかった。最悪だ。15万円のテレビまで壊れた。

それにしても、きょうは外が不思議なくらい静かだ。気晴らしに散歩でも行こうか。

○岡田 機械が壊れたわけではなく、鼓膜が破れていたって話ね。この仕事をやっていると、恐ろしさも倍増だね。

○深田 そうですね。だんだん寒くなってきました。

○岡田 では、とっておきの話をするかな。

○深田 お願いします。

○岡田 ある女の子がいた。性格は明るく、学校ではたくさんの友達に囲まれていた。また、女の子は大のおじいちゃん子で、おじいちゃんも女の子が大好きで、非常にかわいが

っていた。

しかし、おじいちゃんは入院しており、余命は長くなかった。医師が残りわずかの命であることを伝え、女の子は両親に連れられ、病院に行った。病室で女の子の両親はおじいちゃんと話をした後、医師の説明を受け、病室を出ていった。病室には、おじいちゃんと女の子の2人が残った。

女の子は、おじいちゃんといろいろなことを話した。しかし、途中で女の子は泣きながら、「おじいちゃん、いなくなるの」と聞いた。すると、おじいちゃんは少しだけ黙ると、「おじいちゃんが死んだら、お父さんとお母さんと一緒に、かな、死んでくれるかい」と言った。女の子は「うん……。でも、死んじゃだめだよ」とつぶやいた。

その後、女の子は家に帰ることとなり、その翌日におじいちゃんは帰らぬ人となった。女の子は、その日じゅう、わんわんと泣いた。

1カ月後、ある記事が新聞の隅に載った。その見出しには、「一家心中、動機は全くの不明」と。

○深田 一家心中ですか。

○岡田 この話のポイントは、その動機だよ。

○深田 うーん。あつ、わかりました。

○岡田 さて、答えを聞きますか。

○深田 女の子がかなという名前で「かな、死んでくれるかい」だった。

○岡田 おお、さすがだね。

○深田 っていうか、岡田さん、もう休憩時間が終わっていました。

○岡田 ああ、それが一番怖くなる話だね。

以 上